

事実とクオリア

——コネクシヨニズムと直接実在論——

水 本 正 晴

一九八〇年代より(再び)認知科学において古典的計算主義と共に(あるいはそれに代わり)一つのパラダイムとしての地位を獲得するに至ったコネクシヨニズムは、哲学においては消去主義的唯物論を主張する文脈で使われることが多いが、本稿で私は、コネクシヨニズムのパラダイムに基づきながら、事実というカテゴリーを用いてあえてそこからクオリアを自然主義的かつ実在論的に理解する枠組みを描き出したい。

0 展望

民間心理学と呼ばれるものは、我々の日常の事実認識能力(Fact-Recognition Capacity)によって捉えられる心的事実が構成する理由の空間であると別の場所で私は論じ

(2)た。では事実とは何か。本稿では、事実とは理由の空間と結び付けて実在論的に説明できる存在者であると論じる。

この考えによれば、事実はコネクシヨニズムのモデルで理解できる認識能力によって捉えられる世界の(客観的)アスペクトであり、そのため、脳内にも事実そのものにも、言語的、構文論的構造に似たものを想定する必要はない。だが、このような捉え方においても、事実は、(構文論的でないにしても)何らかの構造を持っているはずである。以下では主に、事実の構成要素としての性質の存在の自然化がいかなされるべきかの考察を通し、自然主義的にクオリアの実在論を展開する道を示したい。

心の哲学を正しく自然主義のプログラムに乗せるには、「認知能力」を説明に正しく組み込むことが是非とも必要

であるが、これを避けてきたために、過去の言語哲学においては、その様々な認識論的、存在論的困難にもかかわらず、疑似行動主義が長く生き残ることとなった。記号操作主義は、認知能力とその内的構造にコミットする理論ではあったが、構文論的操作の対象となる内的記号をアプリアリに前提し、民間心理学のダイナミックな側面を捉えそこなかった。解釈主義は逆にそれを第三者からの単なる解釈やスタンスの問題とすることで、心的内容の因果的効力を神秘的なものとしてしまっている。それに対し、コネクショニズムは認知能力を説明するモデルではあるが、これまでは消去主義的唯物論を支持するために哲学者によって利用されることが多かった⁽³⁾。

我々のここでの戦略は、コネクショニズムによって我々の自然な認知能力を正当に評価し、それによってまずは、しばしば単なる解釈やスタンスの問題に還元され、自然の中で二級市民としての地位しか与えられない世界の諸性質を、正当に実在論的に捉えることを可能にする枠組みを描き出す。そしてそれに基づき経験の質としてのクオリアをも同様に実在論的に説明することを目指す、というものである⁽⁴⁾。

1 コネクショニズムと実在論

1-1 概念の実在論

言語哲学が隆盛を極めた二十世紀の哲学において、概念はしばしば抽象的なもの、それゆえ存在論的に疑わしいもの、厄介なものと思なされ、あるいは内的、私的なものであり、それゆえそれへの言及は極力避け、公共的言語のみを扱うことが正しいアプローチである、などと言われてきた⁽⁵⁾。しかし近年のコネクショニズムは、我々の頭の中で概念がいかに実現されているかについての実在論的なモデルを提供してくれるように思われる⁽⁶⁾。それによれば、認知的なシステム(生物)における概念の生成は、学習によるベクトル活性化空間の分割として理解される。そしてもしそうならば、(必ずしも頭の中にある意味と違い)概念は脳内に物理的基盤を持つと言える。すなわち脳において、概念は膨大な数のニューロンの活性化パターンとして物理的に実現されているのであり、それは環境との相互作用によるシナプス結合の重みの調整を通して学習、保存される。この過程は並列分散処理を行うコンピューター(もしくはそれをシミュレートする直列処理コンピューター)の中で、

ネットワークを逆伝播法(backpropagation)によって「訓練」することとしてモデル化でき、そこでは概念は、抽象的なベクトル空間においてネットワークの訓練中に次第に出現し安定化する、階層的に仕切られた領域として実現される。⁽⁷⁾ こうして獲得される概念は、プロトタイプとの類似性に基づいて個別化され、それゆえ明確な境界を必要としないような柔軟性や文脈依存性を特徴として持つ。⁽⁸⁾ これは実際に我々が持つ概念についての、記号操作主義よりはるかに脳の現実に近いモデルである。ここでネットワークの中に実現されているものは、その訓練の過程から明らかのように、実際は言語以前の「識別能力」ではないが、これをチャーチランドが「概念」と呼んだのは、決して不当なことではないだろう。このような概念は、従って、「認知的概念(recognitional concept)」の一種であると言える。⁽⁹⁾

だがこうしてニューラルネットワークによって実現される認識能力はほぼすべての高等動物(およびなめくじなどを含むかなりの下等動物)に見られるものである以上、我々は、人間以外の動物にも正当にこの意味での概念を帰属させることができる。⁽¹⁰⁾ 我々がこのような、チャーチラン

ドの言う動物と人間との「連続性テーゼ」(前掲書p.114、邦訳一四六頁)を受け容れるならば、人間の心の考察も、まずはそのような、受動的に働く認識的概念から始めるべきであろう。実際の心の哲学の問題の多くは、言語哲学者(そしてその伝統を引き継いだ哲学者)が「概念的」と「言語的」の間の距離を見誤ったことから生じてきているように思われる。

1-2 性質の実在論

逆に、ネットワークによって実現された概念によって認識されるものについて言えば、ここでの認識とはまだ「識別」というほどのものではないが、そこで識別されているのは世界のある特定の性質であると言える。⁽¹¹⁾ ネットワークは訓練によって特定の性質を認識できるようになり、対象はそのような性質を通して同定される。概念は、この意味で性質の認識能力を構成しているのである。そして実際そうした神経ネットワークによって認識を行う有機体にとって性質を持つもの、すなわち「対象」、または「特殊者」とは、そのような性質の束そのものであると言える。このような考えは、このままでは形而上学において「束理

論 (bundle theory)」と呼ばれるものと区別できない。そして後者は、アームストロングがそれを「カテゴリー・ミステーク」とさえ考えているように⁽¹²⁾、哲学者の間で広く受け入れられているとは言えない理論である。だが、ここで重要なのは性質の実在性であり、性質と特殊者との関係は以下ではほとんど関わって来ないため、我々は以下これを前提して話を進める。

この束理論に従えば、本質的／非本質的性質の区別は相対的、文脈依存的なものではないのであり、今、世界中のある性質を認識できるように訓練され、よってその性質を識別する概念を獲得した特定のニューロン群がある時、当の性質の存在はその概念の形成の原因なのであり（両者の関係はここではタイプ間の関係であることに注意）、それによってそのような概念が初めて可能となったのである。この意味で、経験を通して獲得された認識的概念の存在は、それに対応する性質の存在をも保証するように見える。（もちろん、タイプでなくトークンとしての性質は、対応する概念が獲得された後もはや存在しなくなっているかもしれないが、それでもその性質の過去における存在は揺るがない。）もしそうならば、コネクショニズムは、概念と

共に性質の実在論をも支持する理論であるということになる。⁽¹⁴⁾

このような考えに対しては、「選言問題」というものが脅威となるように思われる。⁽¹⁵⁾ それによれば、例えばカエルの視覚システムは、それ単独ではハエと単なる「動く黒い点」とを区別できない（ただしもちろんカエルの視覚システムは、自然選択を通して形成されたのであり、文字通りのネットワークの訓練による概念形成とは違う）。よってカエルの視覚システムの捉えている性質とは、「ハエ又は黒い点」という選言の形でしか記述できない、とされる。

この例は本来、表象の因果説に対する困難として提出されたものであるが、この文脈においては、単なる識別能力としての概念の存在は、それに対応する性質の存在を導かない、ということを示すように思われる。

だが、このカエルの視覚システムの説明が正しいとしても、カエルがハエでなく黒い点を捉えた時、「誤った」と正当に言えない、というわけではない。そう見えてしまっているのは、ここでの考察の枠組みが感覚様相を単独で捉えずに、覚様相間の連動を容易に説明できるが、カエルの視覚と結

びついたニューロン群も、他の感覚様相、例えば「味」でないにしても)口の中の感触、満足感等に基づく識別能力と結びついていると考えられ、もしそうであれば、その時カエルはもはや特定の感覚様相に依存しない、正当な「ハエ概念」を持つと言えよう。なぜならこの時、カエルがたとえハエ以外のものを捕えたとしても、カエル自身が「何もなかった」、「別の何かだ」といった「誤り」を認識できるからである。もちろんこの主張は生物学的探求の結果に依存するだろう。だがここでの論点は、ある生物が特定の概念を持つか、ある振る舞いが何を意図したものが、は経験的に検証可能であり、決して哲学者が勝手に「帰属」するものではないということである。そして実際ここでは、「ハエ概念」に対応する「ハエ性質」がカエルの環境に存在する、と正当に言える。

もちろんこのようにして示される性質の存在とは、ハエにとっての性質、人間にとっての性質、という認識能力の主体に相対的な性質でしかない、と言えるだろう。だが、相対性は非実在性を含意しない。むしろ、コウモリの超音波の世界も、犬の音と匂いの世界も、人間がそれらを見「能力を持たないだけで、本当はこの世界にある、と言

うべきである。人間が知覚できないことを理由に、それらの実在性を否定するのは悪しき人間中心主義であろう。このような、認識能力と認識されるものとが内的関係にある⁽¹⁶⁾、という実在の捉え方は「内在的実在論」と呼べるものであるが、この考えには確かにいくつかの困難が伴う。だがそのような困難とその解決の方向性についてはすでに別の場所で論じた⁽¹⁷⁾。ここでより重要なのは、その持つ直接主義的含意である。以下ではそれをより詳しく見ていくことにしよう。

1-3 直接実在論

現代の物理主義の中で最も有力な理論の一つである表象主義は、経験において現われる性質は表象内容としてあり、世界に実在すると考える必要はないと考える。しかしこの考えに従えば、我々は世界と表象⁽¹⁸⁾を介してしか接触できないように見える。それに対し、我々の上で見た内在的実在論の考えでは、世界の性質は概念によって直接知覚される、とすることができ⁽¹⁹⁾。このような立場は一般に直接実在論と呼ばれる。

同様な直接主義の立場から、世界の中の諸性質を自然主

義的かつ実在論的に捉え、研究して来たのが生態学的心理学という心理学の一派である。彼らは「生態学的実在論」の立場から、環境が生命体に「アフォードする」諸性質に注目してきた。(ただ、世界の探求と心の探求とが密接に結びついている、というそれが内在的実在論と共有する理念を理解できなければ、そもそもなぜこのような研究が「心理学」であるのか理解できないであろう。) だが、この生態学的心理学は、その創設者のギブソンがしばしば脳内の情報処理過程を否定したこともあり、「科学的でない」と誤解されることが多かった。また例えばギブソニアが存在するとする「アフォードダンス」には、環境の中の「面」「地面のキメ」「割れ目」「身を隠すところ」「座るところ」「すり抜けられる隙間」等、無数の種類がある。初めてこのようなリストを見れば、そんなものが環境の中に「存在する」などと言えるのか?と懐疑的になるのも無理はない。

だが、視覚認知過程の研究は、むしろそれらを支持するように思われる。例えば人間の視覚野は、第一次視覚野(V1)以下PIT野、AIT野など30もの小領域に分かれている。その中でも側頭葉のMT野は、動きの認識を受

け持ち、そこを損傷した者は「運動盲」となり、動いているものがなめらかに移動せず、止まった絵の連続として見える。⁽²²⁾ギブソニアンは「運動」の存在をもアフォードダンスとして認めるが、上の事実は、運動が、特定のモジュールによって知覚される環境の中の性質である、ということをも物語っているように思われる。同様に第一次視覚野には「特定の」動きの方向、「スピード」、「回転運動」、「背景と動くもののズレ」、「奥行き」等、といった特定の性質にのみ反応する細胞がそれぞれ存在しており、より高級な、人の顔の認識等もV1からV2↓V4↓PITという経路を辿り、最後にAIT野でなされる、ということがわかっている。⁽²³⁾

これらの事実は、一見脳内に表象がある、すなわち、このような特定の性質にのみ反応する細胞は、その性質を表象しているのである、という考えを支持するように見えるかもしれない。しかし、上に見た選言問題のような表象にまつわる「誤り」の説明の困難を考慮すれば、それらはむしろ、視覚の過程がギブソンの言う「情報の抽出に基づく理論」⁽²⁴⁾にかなり近いことを示すように思われる。つまり、我々が無意味な物理的「刺激」を無意識の解釈を通して認

識する(ギブソンが批判する情報処理モデル)というのであれば、恐らくあらかじめ存在する脳内の表象が内的像を構成せねばならないだろうが、世界の中に実在する性質が直接知覚され、該当するニューロン群を活性化させている、というのであれば、上に見た脳の機能は、(受動的な)検出器として働いていると見るのが妥当であろう。⁽²⁵⁾

また、確かにその知覚の説明(特に図形アルファベット説)が正しければ、諸性質はばらばらに知覚されるのであり、その意味で、ある情報処理が行われていると言えよう。だが、対象が「何か」を認識するニューロン群は、それらの情報を側頭葉で(無意識の推論によって)「再構成」していると考えるべきではない。そうでなければ構成されたものを再び「見る」あるいは「知覚する」器官が別に必要となるであろうからである。そのようなプロセスが余計であるならば我々はむしろ、A I T野では、全ての情報を、ニューロンの活性化パターンの実現として同時に直接、一挙に「知覚」していると考えるべきであろう。⁽²⁶⁾ またそうであれば、人間の場合、単なる生物学的レベルを越えた、言わば人間特有のアフォードダンスとして、より複雑で高度な性質、すなわち社会的性質、政治的性質、美的性質、など

を直接知覚する能力をも具えていると考えるのは自然であろう。(こうしてそのような性質の認識能力を説明することは、それらの性質がいかにして我々の生活形式に埋め込まれているかを説明することにもなる)。

サール(Searle 1983)も、「表象」という考えによって直接性が脅かされることを自覚しており、誤解を避けるため知覚経験を表象でなく「提示(presentations)」と呼ぶよう提案している(p.5, 邦訳六三頁)。だが、残念ながら、彼は提示も表象の特別な部分であるとし、経験を志向性を帰属させることを放棄しようとはしなかった。この志向性が保持される限り我々の求める意味での直接性はもはや得られない。サールは志向性を説明して、不安という意識経験があるとき、この「不安についての経験」における「についての」(of)は、「へびについての恐れ」といった志向性の「についての」(of)とは全く異なると言う(邦訳三頁)。だが、我々の直接主義が正しければ、へびについての経験(内容)は、へびそのものをその中に含んでいる。そしてもしそうならば、そのとき我々は、不安の経験が志向的でないのと全く同様に、知覚経験も志向的でない、と言うことができるはずである。

またサールは、我々は単に我々の経験的機構に関する限りでの世界の在り方しか知ることができないのではないかと、という懐疑に対し、世界の在り方という我々の概念こそが、我々の機構、および世界と我々との因果的交渉に相対的なのである (Searle 1983, p.76, 邦訳一〇六頁) と言う。この言葉は一見、主体と世界との相互作用から世界について考える内実的実在論と近い見解に見える。だが、実はそれは見かけのものに過ぎない。彼が「世界の在り方」が我々との関係と相対的なのであると言わず、「世界の在り方の概念」がそのようなであると言っていることに注意せよ。彼によれば、志向内容 (表象内容) と世界の中の事実の間には因果関係が成立しており、知覚の場合は後者が前者を引き起こす、という関係が成立している。そのような因果関係自身が、志向内容の充足条件自身の中にすでに含まれているのだが、まさにそれによって経験内容自身が世界に達しているとは思えなくなってしまうのである。例えば彼は言う。

私が黄色い対象についての視覚経験を持ち、その経験が充足されているとするならば、その時、その経験が文字通

り黄色いわけではないが、それは文字通り引き起こされたものである。さらに言うならば、充足されていようといまいと、それは引き起こされたものとして (as) 経験されている。しかしそれは決して黄色いものとして経験されておらず、むしろ黄色い何物かについての (of) ものとして経験されているのである。(p.74, 邦訳一〇二頁)

このような経験の捉え方は、結局我々が黄色いものを経験することを妨げてしまう。すなわち黄色い対象が我々の黄色い対象についての (of) 経験を引き起こすのであるが、この考えは知覚経験自身が視覚の対象となることを避けようとするあまり、経験を引き起こす対象と、引き起こされた経験内容を厳格に区別し、その結果として直接性が犠牲となってしまうのである。なぜなら、因果関係は通常表象関係以上に強く非・反射律 (これについては後の 2-2 参照) を要請するからである。

経験そのものが黄色い、ある形をしている、と言うことは確かに奇妙であるが、なぜ黄色いものの、ステーションワゴンの形そのものが経験内容の中に登場し、そしてそれを構成してはならないのだろうか (彼はアスペクト自

身も経験の対象となる、と認めている(邦訳七一頁)。ならば経験内容としての黄色アスペクトも経験の対象と見なすことができるはずである。経験内容の中にその黄色いステーションワゴンが登場せず、ただそれによって充足される条件しかそこに存在しないならば、例えばそのステーションワゴンは黄色い、という内容の視覚的経験を持つことと、同じ内容を考えることとの間に、質的違いは全く存在しないこととなる。志向内容はあくまで抽象的に、充足条件しか提示していないからである。だが我々は普通想像や思考と経験とを取り違えることはない。表象主義がこの自発性/受動性の区別を無視する限り、それは説得的な理論とはなり得ないだろう。

経験内容とそれを引き起こす志向対象との間にギャップが残る限り、その対象自身は常に経験の「向こう側」にあり、決して直接「見る」「触れる」ことができないのではないか、という問いが切迫したものとなってしまふ。サールはこれをカントの物自体についての懐疑に見立てているが(邦訳一〇六頁)、ここまでの考察が正しければ、彼にはそのような枠組みを正当に退ける権利はないと言わざるを得ないのである。

また多くの表象主義者は、進化論的に獲得された機能によって表象を説明しようとする。⁽²⁸⁾このように捉えられた「機能」は確かに規範的な概念であり、一見「誤り(誤表象)」を説明できるように思われよう。例えばカエルの視覚システムが「ハエ」を捉えることをその機能としていたとしよう。その時「動く黒い点」を捉えれば、それは確かに「誤って」いたと言わねばならない。だがそれは我々が外からそのような機能を帰属させているからで、あくまでそこで生じたのは「目的とするハエを捉えることができなかった」という行動主義的な、成功/失敗という規準に基づくパフォーマンスな誤りでしかない。それに対し、表象主義者が求めている「誤表象」とは、認知的誤りのことである(そしてそうである「べき」である)。パフォーマンスな誤りなしに認知的誤りが(そしてその逆も)可能であるように、両者は独立であるが、問題は、機能は程度を許す概念であり、例えばもしカエルの視覚システムがその環境において七〇パーセントの確率でハエを捉えたとするならば、そのシステムは七〇パーセント正しく機能しているのであり、ここにあるのはあくまでパフォーマンスな規準でしかない、ということである。表象/誤表象にお

いて前提されている真／偽の規範性は、機能／機能不全におけるそれとは異なり、程度を許すようなものではない。⁽²⁹⁾ ここには明らかに、説明されるべき大きな謎が残されているのである。

「機能」に訴えることは、特定の感覚様相だけを問題とする誘惑を強めるだけである。思うに、こうした表象の問題が特定の感覚様相のみに基づいて議論されてきたのは、それを説明しようとする哲学者が、表象を脳に局在するものと暗黙のうち前提してきた、あるいは(意図的に)脳内に見出しうるものと仮定してきたからであると思われる。表象概念は、視覚のメタファーに頼りすぎており、感覚様相を単独で考える傾向を助長する。だが、たとえ視覚に限ったとしても、コネクショニズムネットワークの「ベクトル完全化」の能力 (Churchland 1995, p.53、邦訳六八頁) が示すように、我々の知覚能力は純粋な知覚的インプットから比較的独立であり、少々のノイズや情報の欠損には惑わされない。この安定性は、概念が他の諸概念と密接に結びついた全体論的ネットワークをなしていることから来ると考えられ、知覚様相を単独に取り出して考察するアプローチではうまく説明できない。さらにここでは、表

象していると言えるのは他の知覚様相を持ち、全体論的観点から「誤り」を認識できる個体であり、決して脳の一部ではない。このこともまた、経験の説明において語られるべきは、表象というより、このように厚みのある、豊かな概念である、ということを示唆していよう。⁽³⁰⁾ すなわち、複数の感覚様相間の連動が考慮に入れられ、それゆえ「概念」とそれを持つ「人」のレベルで表象が捉えられるならば、経験されているのが他にも様々な性質を持つ対象の一つの現われとしてのある性質である、ということを経験主体自身が理解できる、ということを経験で説明できよう。そしてそのとき初めて認知的誤り(それゆえ表象)が意味をなすようになるのである。そしてそう考える方が、機能という抽象的な存在者に訴えるより遙かに自然なアプローチであろう。

2 アスペクトとしての経験内容とクオリアの事実

これまで見てきたような、直接実在論に基づく性質の捉え方によれば、クオリアも、外在主義的捉え方をして、経験される対象の質であると考えられるならば、その実在性も直ちに認められるように思われる。しかし他の性質と違いク

オリアの場合はそれほど簡単ではない。クオリアは経験の内在的質である以上、経験とは独立に存在するものでなく、また経験におけるその存在も、もしそれが因果的効力を全く欠くエピソードのようなものであれば、自然の中に本当に存在すると言えるのか疑わしくなる。従ってこれらを可能な限り自然主義的に説明するために、私はクオリアの存在をそれについての「事実」の存在をもって擁護する。すなわち、クオリアとは例えば「このワインはうまい」といった経験内容を構成する要素であり、それがもし誤っていないければ、その内容は即世界の中の事実でもある。(またこのような考えは、マクドウェルが心的内容と事実との間に「存在論的ギャップがない」(McDowell 1994 p.27)という言い方で語っていたものであり、この直接性は再びギブソニアンのアフォードランス概念に通じるものである。)

第一節で見た「誤り」を巡る表象主義の困難は、直接実在論にも(いやそれにとつてこそ)脅威となるのでは、と思われるかもしれない。すなわち、経験において我々は確かに誤りうるのに対し、我々は世界そのものを直接経験できる(世界に対し開かれている)とする直接実在論が正しいければ、いかにして経験において我々が誤りうるのかは定

かではなくなるからである。

心的内容が存在するためには、その内容の「誤り」がそもそも意味をなすものでなければならぬが、先に見た選言問題もこの文脈で提出されたものであった。かくして表象主義者は経験内容を表象内容と考え、その中に現われる性質を世界の中の存在物として認めなくともよいようなからくりを編み出した。しかしそれは、直接実在論が答えようとしていた問いに何ら答えることになっていないように思われる。それはすなわち、そもそも表象内容が「正しい」時、表象されたものと世界との関係はどういうものであると理解すべきなのか、という問題である。我々が見ているのは常に表象内容でしかなく世界そのものは決して見ることはできない、あるいは我々は表象を介してしか世界とは接触できない、といった破滅的な帰結を避けるためには、その関係は「同一」、と考える他によう思われる。

実際表象主義者であるドレッスキも、経験が正しい時クオリアは経験されている対象の持つ性質である、とする(Dretske 1995, p.84)。しかしこの点で譲歩するならば、そもそもその場合経験内容は、表象されたのではなく端的に知覚され、認識された、とすべきではないのだろうか。それ

ができないのは、表象主義者（及び他の多くの哲学者）が、「誤りの場合を考慮に入れるならば、経験は頭の中にある、とせねばならない」と考えているからである。⁽³¹⁾

しかし我々は必ずしも錯覚論法に屈してそこで「内的なもの」に撤退する必要はない。すなわち、誤っている時に我々が見ていたのは現実のある「見え」、すなわちアスペクトであり、（ギブソニアンの言葉）環境の中に実在するアフォーダンスの一つとして、見る者の存在とは独立に世界の中に存在している、と考えるのである。確かにそのようなアスペクトは見る主体の認知能力や知識状態に相対的である。しかし相対性から非实在性が直ちに帰結するわけではない。それが事実でなく単なるアスペクトであるのは適切な取り囲みや文脈の中に置かれていない、という点においてのみであり、誤ったアスペクトを見ていた者も、取り囲む状況を正しく理解した時、「アスペクト転換」が自然に生じ、正しいアスペクトを見ることが出来る。その時認識主体自身が、以前のアスペクトが誤っていたことを認識することになる。上で我々は、概念は本来的に認識的概念である、と示唆したが、この意味で概念は他の概念と全体論的に結びついて、アスペクト認識能力を構成してい

ると考えられる。すなわち概念のその全体論的結びつきこそがアスペクト転換のようなダイナミックな認識を可能にしているのである（チャーチランドは、コネクショニズムネットワークの実現するこのようなダイナミズムを「科学革命」のアナロジーで捉え、それゆえそれを理論変化の一種と考えている。⁽³³⁾だが私はむしろ逆に、物理学を始めとする諸科学の理論こそが観測装置や観測手続きと共に（共有可能な）事実認識能力の一種を構成すると考えるべきであると考えている。⁽³⁴⁾これによって、そのような認識能力によって認識されるもの、として派生的に説明される事実というカテゴリーは、非知覚的に認識される事実をも含むようになる）。

他方「表象とその機能」といった枠組みに頼っている限り、我々は経験内容の持つ正しさ条件の規範性を単に外から「そう表象することがそのシステムの機能である」として与えるだけであり、結局それは生物学的事実性とは全く独立に外から志向性を帰属させているという意味で疑似行動主義に留まっている。そこに足りないのは、一人称（すなわちその生物個体自身）の観点から、いかに誤りとその認識が可能か、を示すことであり、それが示されない限り、

そのシステムは正当に経験内容を持っているとは言えないであろう。

私はサールやドレツキらと同じく、心的内容は本質的にアスペクチュアル (aspectual) なものであると考える。

経験がアスペクトとしての内容を持つ、と考えるのもこのためである。だがここでのアスペクト概念はウィトゲンシュタイン的なものであり、経験内容としてのアスペクトを決して「表象された内容」とは考えない。なぜならアスペクトは世界の「見え方」であるとしても、何か主観的なものではなく、性質同様、アフォーダンスとして環境に実在していると考えられるからである。例えばpという内容を持つアスペクトは、それが正しい(適切な)文脈、取り囲みの中にあるとき、単にpに「見える」というだけではなくp「である」と言うことができる。すなわちそのようなとき、アスペクトpと事実pとの間には「存在論的ギャップ」はないのである。⁽³⁵⁾ (この意味でアスペクト認識能力はまた、事実認識能力でもあると言えよう。)⁽³⁶⁾ この考え方によれば、そのような経験内容と経験されている当のものは、経験内容が正しければ(表象関係や因果関係にあるのではなく) 同一のものの異なるアスペクトである、ということ

になる。⁽³⁷⁾ その時経験内容は、経験されているものについての単なる「表象(された内容)」ではなく、経験されているもの自身をその中に含む。このことを今クオリアについて言えば、経験される対象の質は対象と不可分なものとして経験内容に含まれており、それが対象とは独立に経験内容として捉えられた時、経験のイントリンジックな質として見られる、すなわち同じものが時に経験される対象の質として、時にクオリアとして見られるのである。

確かに我々は普段、経験内容でなく経験された対象について判断するのであり、その対象の性質を経験の質「として」は考えない(そしてこの意識からの(一定の)独立性はクオリアの実在性を支持する一つの証拠でもある)。だが、実際我々は、時に経験内容そのものを問う。しかしだからといって、そこでは、経験自身が赤かったり甘かったりする、ということを前提しているのではなく、単に赤さや甘さがその経験を(赤さの経験、甘さの経験、として)構成していると考えるべきなのである。

このような立場に対しては、幻覚の場合はどうなのか、と反論されよう。確かに幻覚によって見える対象は頭の中にしか存在していないだろう。従って幻覚経験のクオリア

というものがあるとすれば、それは経験対象の性質の経験への現われとは見なせない。だが、幻覚は明確な機能不全から生じる現象であり、それは派生的な経験であると理解されるべきであろう。それに対し、そのような派生的事例を根拠に、それゆえ経験内容は表象内容である、と考えるのが表象主義である。

表象主義者はまた、クオリアを経験のイントリンジックな質と見なす考えは、経験の質と志向対象の性質とを混同している、と主張する⁽³⁸⁾。だが、ここではそのような混同ではない。そもそも両者は同じものだからである。

表象の表象たる所以は「誤りうる」ということにあり、表象は本質的に非・反射律

$\forall x$ 「(xRx) [x]でRは「表象関係」であり、 $\exists Rb$ は「aはbを表象する」を意味する」

を満たすことを要請する(例えば文字「水」は水を表象するが、それは文字「水」自身を決して表象しない)。ここでは表象するもの(経験)と表象されるもの(経験内容)の間のギャップは埋めることができない。だがもしそ

うならば、経験を表象とする限り、表象される世界との直接的接触は妨げられてしまうように思われる。(同様のことは、両者の間に「::を::と解釈する」、「::を::と記述する」といった関係を知覚経験に認めるアプローチ一般に対して言える。)このような困難は、彼らの、経験は「頭の中」にあるという前提から生じてくると言えよう。これに対し、我々のギブソニアンのアプローチでは、経験とは、知覚機構、経験されるもの、そして適切な文脈からなる一つのシステムの状態であると考えることができる⁽³⁹⁾。その時、それらの要素のどれが欠けても経験は成立しないとすれば、なぜ経験が頭の中に局在しなければならないのかは定かではなくなる。

誤りの可能性があるから、我々が見ているのは内的なものにすぎない、とする錯覚論法を批判しながら、表象主義者自身、「表象」を維持するため、全く同じ内容でありながら、一方の志向対象は存在し、他方は存在しない、という可能性を強調するのは皮肉である⁽⁴⁰⁾。このような前提は、パットナムの「桶の中の脳」の議論を深刻な挑戦としてしまふ。だが例えばサールは、我々は事実、「桶の中の脳」である⁽⁴¹⁾とさえ主張する。確かに「誤り」の可能性は重要で

あるが、だからこそ我々は個々の誤りを真剣に取り扱われねばならないのであり、正しい場合にも誤った場合にも通用する「一般的」説明を与えなければならぬと考えるのは、むしろ結局錯覚論法に屈していることなのである。⁽⁴²⁾我々がここで強調すべきは、誤り自身が我々の理由の空間に埋め込まれているのであり、なぜ誤ったのかを問うことには常に意味がある、という事実である。「幸福はみな退屈なほど似ているのに、不幸には驚くほどの多様性がある」という言葉があるが、それと同様、正しさは我々にとって説明を要するようなものではなく、むしろ認知科学は、驚くほどの多様性を持つ「誤り」(機能不全)の方を、具体的に個別の事例に則して考察していくことから多くを学んできたのである。

だが、このように一般的説明を与えるときに機能不全の事例をもその中で説明しようとすべきでないとするれば、自然主義者は、幻覚の事例を例外として退ける権利があると言える。そしてそのとき経験が頭の中になければならない、という主張にはもはや説得力はないだろう。

またクオリアまでも表象主義の枠組みで説明しようとす立場には、さらなる困難がある。クオリアを表象内容と

見なす限り、それが因果的効力を持つと考えることはできず、よってクオリアはエビフェノメナとされる他ないのである。それに対し我々は、クオリアの事実を確保したこと、以下に見るようにその因果的効力も説明できる。そしてそれは、クオリアの事実が物理的事実とは独立のものであるということも示すことになろう。

3 理由論法

クオリアを支持する議論として常に引き合いに出されるジャクソンの知識論法とは、モノクロの部屋で育てられたマリイが初めて外出した時、たとえ彼女が脳神経生理学と光学を完璧にマスターしていたとしても、「(赤はこのように見える)といった)それまで知らなかった新しい事実を知ることになったはずである、というものである。A knows that p から p への推論は一般に多くの論者が認める以上、そこで新しく知られたものは、クオリアについての事実であり、それはマリイの知識の仮定より、何か物理的事実以上¹の事実である、ということになる。

この議論に対し、多くの者が、マリイが知ったクオリアの事実とは、彼女がすでに知っていた物理的事実²と同

じものであり、その「知り方」において違うに過ぎない、と反論する。⁽⁴³⁾しかしだからこそ、我々はある対象をある与えられ方のもとで知っていても、他の与えられ方では知らないことがあるのであり、ここでは「知られた事実」と異なる「知られていない事実」が存在せねばならないのである。逆にこの事実を無視することは、(ウィトゲンシュタインで有名な)ウサギ・カモの図を見ても、そこに二つの像があるということさえ否定するようなものである。だがそのような立場では、ウサギ像とカモ像の間に違いがある、ということも、一方に気付いていながら他方に気付かないことがある、ということも理解不能となってしまうだろう。それは $a \parallel a$ と $a \parallel b$ の差異、すなわちフレーゲの言う認識価値 (Erkenntniswert) を全く無視することである。⁽⁴⁴⁾だがそのような差異をもたらすことのできる文脈依存的な認識は、すでにコネクションニズムが自然的に説明できる。我々の立場では、ウサギ像に気付かない者は、「それがウサギに見える」という事実を知らない、と正当に言うことができる。もちろん単なるアスペクト(「見え」)の事実からその内容の事実(ここでは「それはウサギ像である」という事実)は導かれぬ。だがクオリアの場合、そ

もそもそのようなギャップは存在しない。

いずれにしても、クオリアを「知り方」に還元して物理的事実以上のものを認めようとする物理主義者にとって、そもそも事実の同一性の規準とは何なのだろうか。それを示さない限り、物理主義者は p と q とを「物理的には同じ」であるゆえに同じ事実と見なすことにおいて、論点先取りを犯していると言わざるを得ない。他方もし我々が、因果の關係項は(出来事でなく)事実であり、それゆえ単称因果言明が「 p ゆえに q 」という形で表される、と考える事実因果を前提すれば、⁽⁴⁵⁾我々は、存在論とは独立に事実の同一性の規準を与えることができる。すなわち、二つの事実は、同じ原因と結果とを持つ時、かつその時に限り同じ事実である。よってもし「知り方」の違いが実際その因果的効力の違いをもたらすのであれば、クオリアの事実もそれと対応する物理的事実と異なる事実であると認められるはずである。

さて、クオリアの事実 ψ と、それと同じ事実とされた物理的事実 ϕ は、理由の空間の中で、非常に異なる役割を演じる。例えば私はそのワインがおいしいかったがゆえにもう一本注文したのであり、その時の私の舌のニューロ

ンの活性化パターンがしかじかであったがゆえにそうしたのではない。また、私はこの一人称に特有の経験をしたからゆえにもう一度そのワインを飲もうとしたのであり、単に人からそのワインがおいしいと聞いて知っていたゆえにそうしたのではない。事実因果を前提すれば、行為の理由はまだその原因でもあると言える以上、異なる因果的効力を持つこの二つの事実は、異なる事実と見なされねばならない⁽⁴⁷⁾(これを知識論法を補完するものとして、理由論法と呼ぼう)⁽⁴⁸⁾。

クオリアも、生存にとって当然重要な意味を持っていたのであり、他の性質同様、判断されねばならなかった。そして実際クオリアについての事実は我々の生活形式の中に埋め込まれており、それを「理由」として我々は次の行為を行うことができる。事実因果を前提すれば、この理由と行為との関係は、即因果関係であると認めることができる。その意味でクオリア(の事実)も正当に因果的効力を持つと言えるのであり、エビフェノメナなのではない。こうしてクオリアは、他の諸性質と共に事実というカテゴリーの中に埋め込まれることで「自然化」されるのである⁽⁴⁹⁾。

4 最後に

ここに論じられたことは、個々の論点についてさらなる詳しい議論を展開する必要があるだろう。だが本稿の目的は、自然主義的立場から、クオリアを消去してしまう(あるいは神秘的なものとしてしまう)支配的な(物理主義的)枠組みに対し、クオリアおよび心的事実一般の実在性を「自然な」ものとして説明する代替的な描像を提示することであった。ここで描かれたクオリアについての描像が、より「自然な」描像であると読者に感じられたならば、本稿の目的は達成されたということになる。

(1) 本論文は、一九九九年の日本科学哲学会における発表原稿を修正したものである。論点を明確にするための修正の他に、特に字数制限の関係から、多くの重要な部分が削除されているが、本質的論点はほとんどオリジナルのままであることを強調しておきたい。

(2) 水本(二〇〇一)参照。

(3) 典型的な例として、Churchland(1995)参照。

(4) ハットフィールド(Hatfield 1991)も、これまでの機能主義や解釈主義は全て「行動を説明する心理学」という

前提に基づいており、これに代えてコネクショニズムによるアプローチを、マーラのタスク分析と親和的な「認知能力を説明する心理学」に基づくものであるとして、その優位性を主張している。私は彼の「表象」を擁護する機能主義的説明には同意しないが、哲学者ももっと認知能力に対して具体的関心を向ける必要があるという彼の主張に強く同意したい。

(5) ここでの概念は、従って、特定の哲学的見解を前提するようなものではなく、我々の持つ素朴な「概念」概念に基づく。それが実際はどのようなものであるのかを描き出すのが、まさに以下の考察の仕事である。

(6) 以下の説明は主に Churchland (1995), Ch.3. による。

(7) このような我々の学習を説明するシナプス可逆性は、小脳において長期抑制型のもが発見されている (立花一九九六 II)。

(8) このようなコネクショニズムの概念の特徴とワイトゲンシュタインの「家族的類似」の考えとの繋がりについては Mills (1993), pp.140-1 参照。

(9) 認識的概念については, Loar (1990) 参照。オリジナルの原稿では、これは「受動的な概念」と呼ばれていた。また以下で我々は、事実認識能力 (FRC) はこのような認識的概念によって構成されている、と論じるが、そこでの

ポイントとは、このようなコネクショニズムモデルによって捉えられる概念というものは、知覚能力を構成するものであり、非知覚的な概念も同様にこのような認識的概念の延長で捉えられるべきだということである。これが正しければ、概念とは一般に、本来的に認識的概念である、と
言
う
こ
と
が
で
き
る。

(10) もちろん人間以外の動物にどんな概念内容を帰属させることができるかは依然問題ではある。(この問題については Allen & Hauser (1991) が参考になる。)しかしむしろそれは翻訳の不確定性の話であり、その段階では概念の実在性はすでに前提されていると考えるべきあり、そこから概念の反実在論は導かれない。

(11) ここでの性質とは世界の中に例化された具体的性質であるが、これが例化された普遍者なのか、typesと呼ばれるものか、については私は(少なくとも本稿においては)中立である。またここでは我々の概念によって構成された認識能力によって捉えられるものを広く性質と呼び、その意味で「関係」もその中に含まれる。また、我々は性質を「パターン」と同一視しない。概念は単なるパターンより遥かに豊かな内容を持つ性質を捉えることができるからである。例えば「パターンの途絶え」等も世界の重要な性質の一つである。

また別に、性質とは特殊者間に働く因果的傾向性に尽きているのか(傾性的性質)、そのような傾向性と独立な「カテゴリー」としてあるのか(カテゴリー的性質)、という見解の間で対立があるが、この点もここでは以下の議論に関わって来ない。この論争についてはArmstrong (1997)の第5章参照。

(12) Armstrong (1997) p.30 参照。

(13) ただし性質の実在性については後(第四節)で改めて論じる。またこれは特殊者の消去ではなく、特殊者の特殊性はそれが現れる事実の特殊性によって、その事実の特殊性は、それを取り囲む事実の総体によって全体論的に、与えられると考える。一般に特殊者の特殊性は性質が実現されるという事実から派生するものであり、それゆえ究極的にはこの世界の特殊性から分与されるものであると私は考える。この見解に従えば、この世界こそが全体として一つの、そして唯一の、真正な特殊者である、ということになる。

(14) では、ユニコーンのような架空の対象についての概念はどうなるであろうか。ここでは我々は、他の動物にも共通する、知覚的で受動的な概念から出発しており、架空の対象についての概念がいかに可能となるのかといった問題は別の論考に譲らねばならないが、敢えてここで答えると

すれば、それはロックら経験主義者の言うように、経験的に得られた観念の複合体なのであり、我々が言語能力を獲得し、概念を自発的にコントロールできるようになった段階で初めて可能となるような概念である。

(15) 選言問題についてはFodor (1984) や Fodor (1990) 参照。

(16) 内的関係とは、関係項の存在だけでアプリアリに成立する関係のことである。

(17) 水本一九九九も参照。この考えは、主にワイトゲンシュタイン＝マクダウェルの哲学に基づく。

(18) ここでの「表象」とは、単に我々が素朴に「AはBを表象する」と言う時に前提している何か、であり、以下の節に見るような「非・反射律」を満たす、という制約はあるものの、その詳しい意味はまさに以下の考察が明らかにしようとしているものである。

(19) Armstrong (1968) 参照。

(20) 例えばGibson 1979, 14. 2 参照。

(21) 佐々木一九九四。

(22) 例えば立花五三頁、Ramachandrand & Blakeslee 邦訳一〇頁等を参照。

(23) 立花五一―五四頁。立花の本に登場する理化学研究所の田中氏は、A I T野で突然高度な認識がなされることか

ら、「コラム」という10万個ほどの神経細胞からなる単位ごとに図形の単純な特徴を認識し、それらがみな反応し、その反応が組み合わされ対象が認識される、という「図形アルファベット説」を提唱している。

(24) Gibson (1979), Ch.14 参照。

(25) ここで、ロックの一次性質と二次性質という対比で言えば、我々の立場は、二次性質の実在性を強調するものであるとは言えるが、そこからそれこそが本来の実在であり、世界はそこから「構成される」のだ、といった現象主義的逆転を意図しているわけでもない。我々が目指しているのはあくまで、二次性質と呼ばれてきたものが、いかなる意味で（いかに）客観的に存在すると言えるか、を説明することだけである。

(26) ただ私はここで、このような視覚野の部分領域のみに、概念が単独で表現されている、ということをお願いしたいわけではない。視覚野が記憶の連合野から孤立すれば相貌失認が起こるように、概念が概念として働くためには脳内の他の諸領域と密接に結びついていなければならないだろう。動物の場合はその行動と結びつく必要があるし、人間の概念は特に言語と結びついており、左半球のブローカ領域やウェルニッケ領域とのかなり密接な繋がりを持っていることは想像に難くない。

(27) Robinson 1998 のハーマン、ドレツケ批判を参照。

(28) Papineau (1993) / Dennett (1995) / Dretske (1995) など参照。

(29) ただ、我々はここで進化論的説明一般を拒否しているのではない。むしろ従来の進化論的説明が決定的な側面を説明しきれない、と主張しているのであり、我々は後に我々自身の進化論的説明を試みる。

(30) これに対し表象主義者はこの概念こそが表象なのである、と言うかもしれない。だが、もし文字どおり両者を一視すれば、主体は概念が全く働いていない時も常に表象を持つことになる。それに対し概念の働き（コネクション）をネットワークの活性化パターン）を表象を持つことと同一視しようとしても、上に見たように、表象概念に不可欠な「誤り」の可能性は、あくまで「人が表象する」、という身体の外へと広がるより大きな文脈の中に位置づけられなければならないのであり、「脳（の一部）」が表象しているのではない。さらに、経験において概念はあくまで受動的に働く単なる識別能力としてであり、経験されている対象の認識を可能にしていると言えても、それを表象しているとは言えない。なぜなら経験においては概念によって捉えられるもの自身が経験内容を構成しており、（以下に述べる）非・反射律を満たさないからである。（も

もちろんここで私は直接実在論を前提している。これについては以下の節参照。) 従って、シミュレーション(これは人間以外の動物や言語以前の子供も持っている可能性が高い)や思考等の自発的文脈以外では、概念は「表象」しな^いと考えるべきであろうし、上に論じたようにそれが表象するのは「人」がそれを持つ限りである。

- (31) Dretske 1995, p.35⁷, Searle 1983, p.230 (邦訳三一九頁)等。
- (32) 注(9)参照。
- (33) Churchland 1995 Ch.5参照。
- (34) このような考えについては、水本(二〇〇一)参照。
- (35) このようなウィトゲンシュタインのアスペクトと取り囲みの考えについては拙論1999a参照。
- (36) またこうした概念の構成する事実認識能力のダイナミズムは、信念のダイナミズムとも直接に結びついていよう。
- (37) この考え方に抵抗を覚える者は、環境についての情報と同時に認識者自身(の運動等)についての情報でもあるというギブソニアンのよく知られた主張を想起せよ(例えば Gibson 1979, 10, 11, 8)。
- (38) Harman 1990⁷ また Searle 1983, p.74 (邦訳一〇二頁)も見よ。
- (39) 特に全てを「頭の中」に還元する「方法論的独我論」

の誤りを示すギブソニアンの具体的な議論については、Rowlands (1995) が参考になる。

- (40) Harman 1990, p.34, Searle 1991, p.239 など。
- (41) Searle 1983, p.230⁷ 邦訳三一九頁。
- (42) これについては特に、経験内容が存在依存的かどうかについてのサールとマクドウェルの間の論争(Searle 1991)を参照。
- (43) Churchland 1995 Ch.8⁷ Dennett 1991, Ch.12, 5⁷ Papineau 1993 pp.112-4⁷ 信原一九九九、第七章三等。
- (44) Papineau 1993は、これがフレーゲの Sinn の問題であると正しく認識しているにも拘わらず、この点を理解できていない。彼は経験を「あの経験は鮮やかだ」といった指標的構築に還元し、マリーが得たのはすでに持っていた概念に対する「一人称的概念」であるとする (pp.112-4)。だがまさしくそれゆえに、マリーは同じ概念の一人称的側面を「知った」のではないか? いずれにしてもこのような認識価値の無視は、Sinn と共に経験内容そのものの消去を導くだろう。
- (45) 事実因果を支持する議論としては、水本一九九九c、二〇〇二参照。
- (46) これはメラリー (Mellor 1985) の定式化であるが、もちろんこれはデーヴィッドソンによる出来事の同一性の規

準の借用である。

- (47) ドレツケ (Dretske, 1995) は、能力の意味の「知る」と事実の意味の「知る」とを区別し、マリーは事実の意味においては何も新しく知っていない、と主張する (pp.85-6)。だがこれも、独立な同一性の基準を与えることなく p と q とをアプリアリに同じ事実としている点で論点先取である。

- (48) この論文のオリジナル原稿は一九九九年に発表されたものであるが、その後因果的効力の違いによって物理主義を否定する、これとある意味非常に似た議論が、Crane (2001) の第一八節で展開されている。ただここでの我々の強調はあくまでクオリアの実在性の擁護にあり、その定義自身について論争のある、物理主義の否定にはない。また、クレイン自身知識論法に関しては、その議論自身は正しいものの、結論として物理主義の否定は導かないと考えている。これは彼が「事実」という概念を(我々と違い)存在論的に真剣に受け取っていないからである。
- (49) ただし、ここではこの議論によって、クオリアの実現についての科学的説明を否定しているわけではない。クオリアには、それを表現する物理的事実が確かにある。ここでの論点は、そのような単なる「実現」は(上で定式化した事実の同一性の基準からして)「同一性」までをも保証

するものではない。

参考文献

Allen C. and Hauser, M. D., "Concept Attribution in Non-Human Animals: Theoretical and Methodological Problems in Ascribing Complex Processes", *Philosophy of Science*, 58, (1991).

Armstrong, D. M., *A Materialist Theory of Mind*, London : Routledge and Kegan Paul (1968).

Armstrong, D. M., *A World of States of Affairs*, Cambridge University Press, (1997).

Boghossian, P. A., "The Status of Content", *The Philosophical Review*, Vol. XCIX, No.2 (1990).

Churchland, Paul, M., *The Engine of Reason, the Seat of the Soul*, MIT press, 1995. 邦訳『認知哲学』信原・高橋 訳、産業図書、一九九七年。

Crane, T., *Elements of Mind*, Oxford (2001).

Dennett, D. C., *Consciousness Explained*, Little, Brown and Company, (1991).

Dennett, D. C., *Darwin's Dangerous Idea*, Penguin Books, (1995).

Dretske, F., *Naturalizing the Mind*, MIT Press, (1995).

- Fodor, J., "Semantics, Wisconsin Style," *Synthese* 59, (1984) 231-250.
- Fodor, J., *A Theory of Content and Other Essays*, Cambridge, Mass.: MIT Press, (1990).
- Gibson, J. J., *The Ecological Approach to Visual Perception*, Houghton Mifflin Company, (1979). 邦訳『生態論的視覚論』古岡・辻・村瀬共訳、サイエンス社、一九八五年。
- Harman, G., "The Intrinsic Quality of Experience", *Philosophical Perspectives*, 4 (1990).
- Hatfield, G., "Representation in Perception and Cognition: Connectionist Affordances", *Philosophy and Connectionist Theory*, ed. by Ramsey, Stich, Rumelhart, Lawrence Erlbaum Associates, (1991).
- Loar, B., "Phenomenal states" *Philosophical Perspectives*, 4, (1990).
- Mellor, D. H., *The Facts of Causation*, Routledge, (1995).
- McDowell, J., *Mind and World*, Harvard, (1994).
- Mills, S., "Wittgenstein and Connectionism: a Significant Complementarity?", *Philosophy and Cognitive Science*, ed. by Hookway and Peterson, Cambridge, (1993).
- Papineau, D., *Philosophical Naturalism*, Oxford, Blackwell, (1993).
- Ramachandran, V. S., and Blakeslee, S., *Phantoms In the Brain: Probing the Mysteries of the Human Mind*, (1998). 邦訳『脳の中の幽霊』山下藤子訳、角川書店、一九九九年。
- Robinson, W. S., "Intrinsic Qualities of Experience: Surviving Harman's Critique", *Erkenntnis* 47, (1998).
- Rowlands, M., "Against methodological solipsism: the ecological approach", *Philosophical Psychology*, Vol.8, No.1, (1995).
- Searle, J. R., *Intentionality*, Cambridge, (1983). (邦訳:『意向性』坂本百大監訳、誠信書房、一九九七年。)
- Searle, J. R., "Response" to McDowell, *John Searle and His Critics*, ed. by LePore & Gulick, Blackwell, (1991). pp.237-241.
- 信原幸弘『心の現代哲学』勁草書房、一九九九年。
- 水本正晴(一九九九a)、『取り囲む』ニヒューイットゲン シタインの Umgebung 概念をめぐって』『哲学の探求』第二六号、一九九九年。
- 水本正晴(一九九九b)、『マクドウェルの内在的实在論』『科学哲学』32-2、一九九九年。
- 水本正晴(一九九九c)、『事実と出来事』デーヴィッドソンのアプローチに抗して』『科学基礎論研究』第九一号、一

九九九年。

水本正晴 「事実と民間心理学」もう一つの自然化へ向けて」

『科学基礎論研究』第九五号、二〇〇一年。

水本正晴 「事実と因果―チャンスと因果の実在性」『科学基

礎論研究』第九七号、二〇〇二年。

佐々木正人、『アフォーダンス―新しい認知の理論』岩波科

学ライブラリー、岩波書店、一九九四年。

立花隆、『脳を究める』朝日新聞社、一九九六年。

二〇〇四年一月二二日受稿

二〇〇四年一月二二日レフェリーの審査
をへて掲載決定

(日本学術振興会特別研究員)